

マックス・ウェーバー “Politik als Beruf” に寄せて

兵庫県立大学 林 昌彦

マックス・ウェーバー “Politik als Beruf” を読み直した。もちろん翻訳でだが。最初に読んだのは 40 年以上前になる。学生時代に購入した脇 圭平訳の岩波文庫は、1981 年発行（第 3 刷）で、定価は 200 円である。ちなみに『職業としての学問』は、尾高邦雄訳の岩波文庫で、1981 年発行（第 45 刷）の定価は 150 円である。

他方、2018 年に発行された野口雅弘訳の講談社学術文庫のタイトルは、『仕事としての学問 仕事としての政治』（以下『仕事』という。）である。こちらは合本である。ドイツ語では、それぞれ “Wissenschaft als Beruf”、“Politik als Beruf” であるから、“Beruf” の訳が異なる。“Beruf” は、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でも鍵概念である。訳者の野口は、『仕事』の凡例において、次のように解説している。

「二つの講演は、これまでほとんどの場合、「職業としての学問」、「職業としての政治」と翻訳され、このタイトルで親しまれてきた。しかし、日本語の「職業」は「日常従事する業務。生計を立てるための仕事」（『広辞苑』第七版）のことであり、これでは（神からの呼びかけによる）「天職」という「ベルーフ（Beruf）」がもつ意味合いが消えてしまう。かといって、全体を「天職」ないし「召命」で訳し通すと、あまりに不自然になる。……そこで本書では、タイトルも含めて基本的に「事」に「仕」えると書く「仕事」を用い、生計を立てるための業務を指す場合は「職業」、天職や召命という意味合いが強いところでは「使命」ないし「使命を受けた仕事」などとした。」（『仕事』8 頁－9 頁）

なお、野口雅弘『マックス・ウェーバー』中公新書、2020 年（以下『野口解説』という。）においても、同様の記述がある（78 頁－80 頁）。

さて、講演「仕事としての政治」は、次のように始まった。

「みなさんからのご要望をいただき、講演をさせていただきますが、この講演は間違いなく、さまざまな点でみなさんをはっきりさせるでしょう。仕事としての政治についての講演で、みなさんが現在進行している時事問題への態度表明を期待するというのは当然のことです。しかし、これについては、講演の最後でちょっとだけ触れるにとどめます。しかも、政治的な行いが生の導き〔生き方〕全体のなかでもつ意味、という特定の問いに関連して、純粹に形式的な扱い方をします。どのような政治をすべきか、政治的な行いに込めべき内容はなにか。こうした関連の問いはすべて、今日の講演から除かなければなりません。というのも、こうした問いは仕事としての政治がなにであり、またなにを意味するのか、という一般的な問いとはまったく関係がないからです。」（『仕事』90 頁）

この講演は、バイエルンの自由学生同盟の依頼により、1919年1月28日にミュンヘンで行われた。前年11月10日に皇帝ヴィルヘルム二世が退位し、オランダに亡命して、第一次世界大戦は終わった。そして、パリ講和会議は1919年1月18日に開会している。それにしても、講演を引き受けておきながら、聴衆の期待に応えないというのは、どう見ても尋常ではない。その理由はどこにあるのか。ヒントは、聴衆は求めているのに、ウェーバーは回避した「現在進行している時事問題」にある。

それは、「すべての、とりわけ自国〔の国益〕を害する公文書を公開すること、そしてこうした一方的な公開に基づいて、一方的で無条件に、結果を考慮せず罪の告白をすること」（『仕事』194頁）だった。そして、それがもたらした結果は、「予見できるかぎり永久に戦争への期待をなくす唯一のいっそう確実な手段は現状維持〔無併合・無賠償〕の講和だったのに、……いまではもう不可能です。というのも、勝者にとって、少なくとも勝者の一部にとっては、戦争が政治的な利益になってしまったからです。これは、ぼくたちが抵抗するのをすべて不可能にした、あの〔平和主義者の〕態度のせいなのです。疲弊の時代が過ぎ去れば、いまや評判を落とすのは戦争ではなく平和のほうです。絶対的な倫理の一つの結果が、これなのです」（『仕事』192頁－193頁）ということだ。

当時は極めて関心の高い問題であったに違いない。しかし、我々にとっては必ずしも周知の事実ではないので、次のように補う必要がある。

「クルト・アイスナーがバイエルン共和国で権力を掌握し、100日ばかりの短い政権期間に行ったことの 하나가、情報公開だった。1918年11月23日、彼はバイエルンの旧政府が保有していた開戦に関する情報を公開した。アイスナーはこれによってドイツの戦争責任を認め、革命政府のレジティマシーを示そうとした。（改行）アイスナーはカント主義者だった。このため彼にとっては、秘密外交から公開性の原則へ、という方針は自然だったのかもしれない。しかし、それ以上に重要なことは、前政権の秘密外交を暴露することの政治的な効果の大きさであった。おそらくアイスナー自身が予期していた以上に、公文書を暴露する政治的効用は大きかった。この情報公開は、国内外の世論の注目を受けることになる。政治的な争いのなかでは、非公開だった情報の公開がときとして有力な武器になることを、アイスナーは世に示すことになった。」（『野口解説』182頁）

ドイツの、いや世界の命運を左右するほど重要な局面において、ウェーバーはあえて「政治的な行いが生の導き〔生き方〕全体のなかでもつ意味、という特定の問いに関連して、純粹に形式的な扱い方」（『仕事』90頁）をした。そして、そのために用いたのが「信条倫理」と「責任倫理」という対概念である。ウェーバーは、アイスナーの行為を「信条倫理」として批判した。「信条倫理」とは、何らかの信条に忠実であることを求め、それがもたらす結果は問わないという態度である。それに対し、「責任倫理」とは、自らの行為の結果の責任を引き受けるという態度である。ウェーバーによれば、この二つの政治倫理は「底知れぬほど深い対立」関係にあるという（『仕事』195頁）。

アイスナーの行為は、結果的にパリ講和会議におけるドイツの立場を困難にし、その国益を害した。したがって、その信条が主観的には真面目なものであっても、「善き」目的の達成には、倫理的に疑わしい、少なくとも危険な手段と、悪い副次的結果の可能性または蓋然性を甘んじて受け入れることがついてまわる」（『仕事』197頁）ということは避けられない。それにしても、ウェーバーは「何十年も再び埋め合わせができないような結果をもたらす可能性がある」（『仕事』194頁）と警告しているが、その後の歴史が示す結果はあまりにも重大であり、悲劇的である。信条の純粋さはときに危険であり、ウェーバーは次のように述べている。

「世界〔現世〕はデーモンによって支配されていること。政治に関わる、つまり手段としての権力と暴力に関与する者は悪魔的な力と契約を結ぶのだということ。そして、善からは善だけが、悪からは悪だけが出てくるというのは、政治に関わる者の行為にとって真実ではなく、むしろしばしばその反対が真実だということ。古代のキリスト教徒にも、こうしたことはよく知られていました。こんなこともわからない人は、政治的にはお子さまにすぎません。」（『仕事』201頁－202頁）

にもかかわらず、「ウェーバーは信条倫理にも責任倫理と同格の地位を付与し、少なくとも政治理論的なレベルでは、信条倫理を一方的に破棄することはなかった」（『野口解説』191頁）。

「信条倫理と責任倫理の対抗関係は、一筋縄ではいかない。ただそれでもこのとき、1919年冬のミュンヘンに集まっていた信条倫理的な若い世代に対して、ウェーバーはあくまで大人の責任倫理の人として向き合った」（『野口解説』192頁）のである。

最後に責任の概念について補足する。英語の“responsibility”は、応答（“response”）できること（“ability”）である。神の呼びかけに応える場合、天職ないし召命（“calling”）と呼ぶ。神のような絶対的存在からの呼びかけでなくても、それに応えることが使命と認識される場合がある。人と人との間でも応答責任が成立する。そして、いったん成立すると、次に使命を果たしたのか否かが問われる。ただし、為すべきことが明確に示されることは稀である。大抵の場合、目的を達成するために必要な手段の選択は、行為者に一任される。加えて、目的それ自体も曖昧である。様々な利害関係者や諸力が関わり、それらの相互作用が複雑であり、不確実である。それでもなお、予見可能か否かを問わず、結果に対する責任が問われる。ウェーバーのいう責任は、そうした政治的行為の結果責任である。

ところで、行為の結果責任を問うには、その行為の詳細が明らかにされる必要がある。それでは、それを誰がするのか。政治的行為に関して、それを行為者に課するのが、アカウンタビリティ（“accountability”）である。ウェーバーのいう責任倫理の立場をとる者は、求められればいつでも、弁明可能（“accountable”）でなければならない。それは、アカウンタビリティを「説明責任」と訳すときに生じるニュアンス、すなわち、事情を説明して相手の理解を求めるということではなく、真実を伝えて自らの立場を明らかにすることである。そして、審判を待つ。使命を受けた仕事というのは、そういうものである。